

神々の遊ぶ庭

島 眞澄

* あらすじ

幼い頃心臓の手術をし、体力に自信のない少女時代を送った安藤由紀(23)は、明るく活動的で山好きな青年久保田遼(25)と出会う。遼はかつて登った大雪山の「神々の遊ぶ庭」の話をする。花が咲き乱れる美しい場所だが、残念なことにカメラの電池が切れて写真を撮ることができなかったと言う。

ある日、遼は北アルプス登山の帰途、交通事故に巻き込まれて不慮の死を遂げる。遼の死を受け入れられず自分を見失ってしまった由紀は、遼は「神々の遊ぶ庭」にいると思いつき、単身大雪山へと向かう。無謀な登山を山小屋の主人黒沢義則(62)に諭される。翌日、由紀は帯広の山好きが集まる喫茶店を訪れる。そこに飾られているたくさん山の写真の中に遼が写っている写真を見つける。マスターの渡辺健治(35)が「神々の遊ぶ庭」で、カメラが電池切れになった青年を撮ってあげたと言う。遼はやっぱり「神々の遊ぶ庭」にいた。由紀は涙が止まらない。

* 登場人物

安藤由紀(23)フリーター

久保田遼(25)会社員

黒沢義則(62)ロッジの主人

黒沢智子(60)義則の妻

橋本靖(35)バスの運転手

渡辺健治(35)喫茶店のマスター

弔問客1

弔問客2

弔問客3

アイヌの人

大学生1

大学生2

大学生3

バスのエンジン音。〜ON

由紀(M)「十勝川沿いの曲がりくねった道をバスは走っていく。雪をかぶった大雪の山々に向かって、バスはぐんぐんと登って行く。頼りなげな陽の光が車内に差し込んでいる。乗客は私ひとり。中ほどに座り、車窓を楽しみながら、寄られている」

由紀「遼、私はもう泣いたりなんかしないよ。だって、もうすぐあなたに会えるんだもの。待ってて、すぐに行くから。『神々の遊ぶ庭』へ。花はもう咲いてる？ほら、高尾山に登った時、話してくれたよね。絨毯を敷き詰めたように、花がいつぱい咲いていて、とてもきれいな所だった。2カ月前。そう、高尾山で・・・」

バスのエンジンの音。〜OUT

野鳥のさえずり。

カメラのシャッターを切る音。

由紀(M)「標高599メートル。関東山地の東に位置する山、高尾山。都心から近く、手軽なハイキングスポットとして、多くの登山者が訪れている」

遼「山桜が咲いてるよ」

由紀「待って、遼」

遼「ほら、由紀、あそこ」

由紀「(息を切らせて)ほんとだ。きれい」

遼「そこ、立ってみて。山桜をバックに・・・」

由紀「(息を切らせて)遼、ごめん、ちよっと休憩」

遼「大丈夫か？」

由紀「うん、平気」

由紀(M)「幼い時、心臓の手術をした。私は病弱で、内気で、声の小さな女の子だった。体育の時間もかけっこも、マラソンも、キラキラ光る夏の日のプールも、いつも見学していた。フィールドの隅で三角座りをして、うらやましげに、ポツンとひとり・・・」

由紀「遼の背中休憩・・・」

遼「ん」

由紀(M)「息が切れると、私は大きな遼の背中にびたりと身を寄せる。顔を埋めて静かに目を閉じる・・・。高鳴る鼓動が遼の鼓動と重なる。深呼吸・・・やがて打ち寄せる小さな波のように、少しずつ、鼓動はいつもの緩やかなリズムを取り戻して行く。そして遼の鼓動と私の鼓動が一つに響き合い、私は深い安堵感に包まれる。大好き・・・遼」

遼「・・・あ、由紀」

由紀「・・・」

遼「もしもし、由紀さん」

由紀「(遼の背中に顔を埋めたまま)ん？」

遼「おくつろぎの所を申し訳ないんだけど」

由紀「なあに？」

遼「後方50メートルあたりに、お年寄りの団体さんを発見。こちらに向かっております」

由紀「かまわない・・・」

遼「あ、先頭のおじいちゃんが、こっちを見て笑ってるよ」

由紀「どうして？」

遼「蚊トンボが電柱にとまってるって」

由紀「蚊トンボ？何、それ」

遼「ハハ・・・、休憩終わり！さあさ出発」

由紀「えー」

遼「ほら、もうそこが頂上だ。てっぺんで弁当にしようぜ。腹減ってきた」

由紀「ちよっと待って。ねえ、ちよっと」

由紀(M)「いつの間にか術後の定期検査も無くなり、私はもう見学ばかりしてる女の子ではなくなつた。テニスだって、サイクリングだって、こうして山登りだって。何でもできるフツターの女の子になった。遼のおかげ。臆病な私に手を差し伸べて、外へ、フィールドの中心へと、連れ出してくれた。私はもう、隅っこにいる三角座りの女の子じゃない」

遼「うつめえー！うっ、ゴホッ、ゴホッ！」

由紀「やだあ、ゆっくり食べてよ。はい、お茶」

遼、むせながらお茶を飲む。

遼「しっかし、山で食べる物って、何でこんなにうまいんだろうな。オレ、今まで飲んで一番うまい水は、山で飲んだ水だ。カップ麺だってカレーだって、山で食べたら最高にうまいんだ。そうそうこの弁当だって・・・」

由紀「ん？」

遼「あ、じゃなくて、由紀が作った弁当は、どこで食べてもうまい！うまいッス」

由紀「フフフ・・・。でもさ、良かったね。夏に長期休暇取れそうで。行くんでしょ？北海道、大雪の山」

遼「うん。今度はコース変えて、トムラウシ山から北へ縦走しようと思って・・・あ、そうだ、この前登った時の写真持って来た」

由紀「へえ、見せて見せて」

遼、リュックの中をガサゴソ探す。

遼「大雪の山ってさ、アイヌの人たちが『ヌタクカムウシユペ』って呼んでんだ」
由紀「『ヌタクカムウシユペ』・・・」

遼「沼や川のある神秘的な高原、ってね」
由紀「ふーん」

遼「原始的で、神秘的で・・・夏はきれいな高山植物の咲き乱れる別天地さ。はい、写真」

由紀「サンキュ。わあ、きれい。そのカメラで撮ったの？」

遼「ああ」

由紀「これは、何て山？」

遼「旭岳。北海道最高峰」

由紀「じゃあ、これは？」

遼「それは、忠別岳。ピンク色はコマクサの群生」

由紀「きれいなえ・・・」

遼「その忠別岳の南にトムラウシ山とカウシ岳って山があつて、その二つの山の間に、『神々の遊ぶ庭』っていう場所があるんだ」

由紀「『神々の遊ぶ庭』？」
遼「そう。神様たちが遊ぶ庭。アイヌの人たちは、『カムイミンタラ』って呼んでる」

由紀「『カムイミンタラ』」
遼「ハクサンイチゲやイワブクロ、チングルマが、白い絨毯を敷き詰めたように、ダーアーツと咲き乱れてるんだ」

由紀「えーっ、どれどれ、どの写真？」
遼「(聞いてない)カウシ岳の雪渓をバックにさ、そつりやあもう、この世のものとは思えないほど、きれいなとこなんだ」

由紀「ねえ、どの写真？」
遼「ブッブー」

由紀「え？」

遼「カメラ、電池切れで、アウト」

由紀「うそ、信じられなーい」

遼「残念だよなー、めちゃくちゃきれいだつたのに」

由紀「何？今度の大雪の山行きて、リベンジ？」

遼「そっ」

由紀「『神々の遊ぶ庭』を撮りに行くの？」

遼「今度はバッチリ撮ってくるから」
由紀「私も連れてってよ」

遼「一緒に行くか？」

由紀「うん」
遼「よーし。じゃあその前に、しっかり食べて体力つける！ほら、最後のおにぎり！」

由紀「えー、もうお腹いっぱいだよ」
遼「あと、そうだな、高尾山100回トレッキング」

由紀「むりーい、無理、無理」

由紀、遼、楽しそうに笑っている

由紀(M)「5月。遼はアルプスに向かった。毎年、大学の登山部のOBたちで登っている、恒例の山行きに参加したのだ。帰って来たなら、山のおみやげ話が楽しみだ。日焼けした顔で、ガンガンひとりだしや

べり続けるんだから。きつと」

遼「無事、下山した。東京に戻る」

由紀(M)「それは、遼からの最後のメールと
なった」

激しいブレーキの音。車の衝突音。

響き渡るサイレンの音。

レスキュー隊員の叫び声。

パトカーからの拡声器の声。

由紀(M)「私は、人生最大の悲しみに直面す
ることになった」

通夜の席。読経が聞こえる。

弔問客1「北アルプスに登った帰りにね」

弔問客2「飲酒運転のトラックが横転し
て・・・それに巻き込まれるなんて」

弔問客3「山が好きなのだったね」

由紀「うそだ！遼が死ぬはずない！私に何も
言わずに！これは夢？そうよ夢！私、き
つと悪い夢を見てるんだ！」

由紀(M)「夢なんかじゃない。遼は本当に死
んだのだ。嘘なんかじゃない。私は本当
にひとりぼっちになってしまったのだ」

由紀「支えきれないよ、こんな悲しみ！胸が

苦しい！息ができないよ！助けて、
遼！」

由紀(M)「眠れない、食べられない、そんな
日が何日も続いた。悲しみの深い海の底
で、冷たく凍りついてしまったような
日々。計り知れない喪失感。明日が見え
ない。絶望の未来」

小鳥のさえずり。

由紀(M)「雨が上がった。雲の切れ間から乾
いた風が、レースのカーテンを揺らした。
フローリングの床に、そっと横になる。雨
に濡れた木々や葉の匂いがくるおしい。
知らない間に、季節はひとつ先へと移り
変わっていた。私だけがあの時のまま、
止まってしまった時間の中で、ひっそり
と息づいている。静かに目を閉じる。も
う枯れてしまったと思つた涙が、一筋流
れ落ちた。その時だ。声が聞こえた」

アイヌの人の声「カムイミンタラ」

由紀「え？」

アイヌの人の声「カムイミンタラ」

由紀「カムイミンタラ・・・『神々の遊ぶ
庭』・・・？そうよ、遼は『神々の遊ぶ
庭』にいる！きつといる！そこで私を待
つてる！」

遼の声「今度はコースを変えて、トムラウシ

山から北へ縦走しようと思つて・・・」

由紀「行かないや！『神々の遊ぶ庭』へ！待
つてて、遼！」

バスのエンジン音

バスのアナウンス「まもなく、終点『トムラ
ウシ登山口』、『トムラウシ登山口』で
ございます。どなた様もお忘れ物のない
ように、お降り願います」

バス、止まる。

橋本「お疲れさま、終点『トムラウシ登山
口』です」

料金箱にお金を入れる音。

橋本「『黒沢ロッジ』なら、その道、まっ
すぐ行って、左に・・・。あ、行っちゃ
つた」

バス、エンジンを切る。

野鳥のさえずり。

橋本、バスを降りて、深呼吸や背伸び
をしている。

義則「ごくろうさん」

橋本「やあ、黒沢さん」

義則「雨、ようやく上がったな」

橋本「これから忙しくなるね」

義則「したって、今年は雪解けが遅いから、

ぼちぼちだあ」

橋本「それ、山菜かい？」

義則「ああ、そうだ」

橋本「今日の客の？」

義則「いやあ、今日は客はひとりもおらん」

橋本「だども、さつき、若い女の子が降りた

よ。薄手のジャケットに、小さなリュック

背負ってさ」

義則「そっか」

橋本「あの格好じゃ、山には登んねえっし

よ？バスもこれで終わりだし」

義則「ああ、じゃあ、久しぶりの客だ。ご馳

走すんべ」

橋本「ハハ・・・、きゃあ」

義則「氣いつけて」

バス、エンジンをかけて発信する。

木戸を開ける音。

義則「ただいま」

智子「おかえりなさい」

義則「客、来たか？」

智子「いいえ、今日は予約も入ってませんし、

誰も」

義則「おかしいなあ。橋本さんが若い女の子

を降ろしたって言うんだ」

智子「町へ行くバスはもう無いし、宿はここ

一軒。まさか、トムラウシ山

に・・・？」

窓を開ける音。

義則「霧って来たな・・・。ちよつくら見て

くるべ」

智子「氣をつけて、あなた」

義則「ああ、登山道から外れてなかったら、

じきに追いつくだろう」

野鳥のさえずり。

山を登る軽快な足音。

由紀「待っててね、遼。今、行くから」

由紀(M)「由紀、だめよ」

由紀「もっと早く気づけば良かった。遼が待

ってるってこと」

由紀(M)「誰も待ってはいないわ」

由紀「こんな遠くまでひとり来て、きつと

びっくりするわ、遼」

由紀(M)「引き返すのよ。もうすぐ日が暮れ

る」

由紀「月が私の行く手を照らしてくれる。億

千万の星も、遼の待つ花園へと導いてく

れる」

由紀(M)「花なんか咲いてない！花園なんて

どこにも無い！」

山を登る重い足音。

由紀の苦しそうな息づかい。～ON

由紀(M)「凍えるわよ！残雪が牙をむいて待

ち構えているわ！目を覚ますのよ！あな

たが向かっているのは、凍りついた絶望

の地！なぜなら、遼は、死んだのよ！」

山を登る重い足音、

由紀の苦しそうな息づかい。～OUT

激しいブレーキの音。車の衝突音。

響き渡るサイレンの音。

不気味な獣たちの鳴き声。

大きな鳥の羽音。

由紀「悲鳴」

義則「大丈夫か？おい、そっかりしろ！」

パチパチと薪ストーブが燃える音。

智子「もっと火の近くにお寄りなさい。ココ

アよ、飲んで。温まるから」

由紀「すみません・・・」

義則「どういうつもりだ！こんな軽装で山に

入るなんて！」

由紀「・・・」

義則「山をあまく見ちゃいかん！」

智子「(制して)あなた」

由紀「・・・」

智子「どこへ行こうとしたの？」

由紀「・・・『神々の遊ぶ庭』へ」

智子「『神々の遊ぶ庭』？」

義則「怒りを抑えながら)トムラウシ山まで

は、慣れたもんでも、まる一日はかかる。

『神々の遊ぶ庭』はまだその先だ。途中、

山小屋はねえから、行くには、それ相当

の装備が必要だ」

義則、ストーブに薪をくべる。

義則「大雪の山々は広くて神秘的だ。だど

も・・・その、広いつちゆうのは、登山

者にとって、自分の位置の把握が難しい。

霧にでもまかれると命とりだ。ヒグマも

おるし、天候も一日で急変する。8月に

雪が降るのもめずらしくない」

雪「・・・」

義則「原始的な魅力つてのは、時には牙をむ

いて、容赦なく襲いかかって来

る。・・・山は怖いぞ。あんた、命、大

雪にせにやあ」

由紀「(涙ぐんで)・・・」めんない。どう

かしてました」

義則「・・・薪が、無くなったな」

義則、木戸を開けて出て行く。

智子「どうして、『神々の遊ぶ庭』へ行こう

としたの？」

由紀「恋人が自動車事故で亡くなったんで

す」

智子「え？」

由紀「あまりに突然で、まだ、信じられなく

て・・・」

智子「・・・」

由紀「去年の夏、彼、大雪の山に登っ

て。・・・話してくれたんです。『神々

の遊ぶ庭』のことを・・・一緒に行くこ

うって、約束してたから、きつと、そこ

へ行けば、会えるんじゃないかって。私

を待っていてくれるんじゃないかっ

て」

智子「そうだったの」

由紀「(泣きだしながら)何考えているんだろ

う・・・私。バカみたい」

智子「ここね、いいお湯が湧いてるのよ。お

湯に浸かるといいわ。気持ち、落ち着く

から」

由紀「・・・ありがとうございます」

智子「階段上がって、右側のお部屋使ってち

ようだい。あなたの行ききたかったトムラ

ウシ山が、窓から見えるから」

温泉、湯の流れる音が響いている。

由紀「私は・・・生きてるんだ」

バスのエンジン音。

野鳥のさえずり。

薪を割る音が響いている。

由紀「ほんとうに、お世話になりました。何

とお礼を言ったらいいか・・・」

智子「また、いらっしやいね。山に会いたく

なったら、いつでもここへ来て」

由紀「はい・・・」

智子「北海道の言葉で、がんばれってこと、

『けっばれ』って言うのよ」

由紀(M)「奥さんは、私の背中をトントンと

叩きながら言った」

智子「けっばれ！」

由紀「(微笑んで)ありがとう」

由紀(M)「黒沢さんが薪を割ってる音がする。

私はその方向に向かって深く礼をし、バ

スに乗り込んだ」

バス、ドアを閉め、クラクションを鳴

らして発車する。

橋本「いいお湯だったっしょ？」

由紀「はい」

橋本「山菜、食べた？」

由紀「はい」
橋本「黒沢さんの奥さん、料理、うまいから」

由紀(M)「バスはゆっくりと山道を下って行く。大雪の山々が遠く小さくなって行く」

バスが止まる音。

橋本「おつかれ様でした。終点『J R新得駅前』です」

由紀「(お金を料金箱に入れながら)ありがとうございます」

橋本「東京まで？」

由紀「はい」

橋本「飛行機？」

由紀「ええ」

橋本「もし時間あったら、寄ってみねえか？」

由紀(M)「運転手さんが、小さなマッチの箱を手渡してくれた」

由紀「山小屋喫茶・・・『ヌプリ』？」

橋本「んだ。友だちがやってる喫茶店。山好きが集まる店で、写真がいっぱいあるんだ。山の写真・・・」

由紀(M)「ブルーグレーの山の絵をバックに、

アイヌ語で『山』と書かれた喫茶店のマッチ。裏返すと住所が書かれていた」

町の雑踏。

由紀「帯広、西三条・・・北・・・あつた！」

由紀(M)「とんがり屋根の丸太づくりの喫茶店。入り口にアイヌ彫りで『喫茶ヌプリ』と書かれていた。ドアを開けると・・・」

カラン、カランと、ドアベルの音。

健治「いらっしやい」

由紀(M)「木の香りがした。机、椅子、カウンター、すべてが木造り。天井は高く、丸太の梁が見えていた。壁には整然と山の写真が飾られていた。まるで写真展のギャラリーのような。私は席に着くのも忘れて、美しい山岳写真に引き寄せられた」

健治「(親しげに)山の仲間が撮った写真だ。

山、好きか？」

由紀「え？ええ」

健治「そっか。東京から？」

由紀「はい」

健治「どこ、まわった？」

由紀「・・・トムラウシ」

健治「えっ、登っただけ？」

由紀「いえ」

健治「そっか。温泉か。黒沢のおっさんと奥さん、元気しとった？」

由紀「えっ？あ、はい」

健治「あのおやっさんに、山、教わったんだ、オレ」

カウンターで調理をする音。

健治「(調理をしながら)したって、何でまた、そつたらトムラウシみたいな山奥に？」

由紀「『神々の遊ぶ庭』へ、行こうと思つて・・・」

健治「え？」

由紀「こんな恰好で山に入って、黒沢さんに叱られました」

健治「ハハ・・・。むちゃするなあ。おっか、なかったべ？おやっさん」

由紀「(微笑んで)はい」

健治「おやっさん、怒ったら、ヒグマよりおかねえからなあ。ハハ・・・。はい、富

良野のメロンと搾りたての牛乳を使った『ヌプリ』特製のメロンジュース！」

由紀「ありがとう」

健治「『神々の遊ぶ庭』の写真なら、一番奥んところに掛ってる。俺が撮ったんだ。見て行け」

カラン、カランと、ドアベルの音。
大学生が数人入って来る。

大学生1 「先輩、まづいっス」

健治「どうした？」

大学生2 「結局、今年の新入部員、ひとりだけっス」

健治「そりゃあ、やばいべ」

大学生3 「これじゃあ、北大山岳部に追っつけどころか、廃部の危機だよなあ」

健治「おいおい、おまえらしっかりしろよ」

由紀(M) 「私は席を立てて、再び壁に掛った

山岳写真に見入った。手前から奥へ、ゆつくりと、一枚づつ」

木の床を歩く音。〜ON

由紀「『噴煙を上げる十勝岳』……『夕

映えのホロカメットク山』……『雲

海に浮かぶオプタテシケ山』……」

由紀(M) 「壮大で優美な稜線。移り行く季節

がかもし出す色彩。光と影。山はなんて美しいんだろう。撮り手の、山を愛する

心が伝わって来る……」

由紀「『雪のトムラウシ山』……」

木の床を歩く音。〜OUT

由紀「あつ……」

由紀(M) 「それは、いちばん奥の写真だった」

由紀「遼！遼がいる！」

健治「(カウンターから大きな声で)その青年、カメラ電池切れだつて言うから、撮ってやったんだ。だども、なんせお互い、山に入ってから久しぶりに会う人間でさあ。話、はずんで、名前も住所も聞くの忘れちまったんだ」

由紀「……」

健治「(カウンターから大きな声で)ハハ……。店の名前言ったから、いつかひよつこり、ここに来るんじゃないかって、飾ってたんだ」

由紀(M) 「涙が止まらない」

由紀「遼……。やっぱりいた……。遼は……。『神々の遊ぶ庭』に……」

由紀(M) 「それは……。確かに遼だった。紺碧の空。雪をかぶったトムラウシ山をバックに白い絨毯を敷き詰めたように、花が咲き乱れている。その花の中に、赤いチェックの登山服を着た、遼が立っていた。私の大好きな遼は……。やっぱり……。『神々の遊ぶ庭』に……。いた」

大学生たちの明るい話声が、店内に響いている。

Σ